

# 幼児教育学科におけるポートフォリオと プロジェクト学習の試み

森 本 美 佐

奈良文化女子短期大学

## Attempts to Project-Based Learning and Portfolio in the Early Childhood Education Department

Misa Morimoto

*Narabunka Women's college*

専門職としての意識を高めるための有用なツールとして、ポートフォリオを活用したプロジェクト学習が注目されている。この学習は、結果ではなく学生が成長していくプロセスを大切にする学習である。筆者は、幼児教育学科において、3年間この学習に取り組んできた。試行錯誤をしながら取り組んだ結果、「他者に役立つ成果物」をゴールとすることで、「意志あるスタート」が可能となり、学生たちは意欲的に取り組めることなどの成果が明らかとなった。また、現状における課題としては、「対話」「評価」「学習テーマ」の3点が挙げられた。

キーワード：幼児教育学科、ポートフォリオ、プロジェクト学習

### 1. はじめに

近年、教育の内容だけでなく方法も重視され、教員による一方的な授業形態から、学習者が主体的な学習ができる参加・参画可能な授業形態への転換が求められている。その方法の一つとして、ポートフォリオやプロジェクト学習を導入した結果、学習効果が高まったという多くの報告がされている。ポートフォリオとは、もともとは「作品ファイル」を意味し、一人ひとりの学習プロセスをみることができ、テストで計りきれない評価を可能とするツールとして教育界や医学界、看護界で広がっている。プロジェクト学習とは、夢や願いを叶えるための学習で、「何のために（目的）、何をやり遂げるのか（目標）」を、学習者が自分のものとして確認しながら学習することである。図1は、筆者が考えるプロジェクト学習のイメージ図である。このように、参加型学習は、学習の結果ではなく学習過程（プロセス）を重視し、論理的思考や判断力などの学習技能を育成しようとするものである。

実際、筆者がA看護専門学校で行ったポートフォリオを活用したプロジェクト学習では、大変効果的な学習ができた。林<sup>1)</sup>の「ナイチンゲールプロジェクト」を参考にしたものであるが、目的としてい

た成人の理解を深めることができ、学生の学ぶ姿勢を高めることができた。

そこで、同じように専門職者を目指す保育者養成課程においても、このような学習方法を行うことで、より保育に興味を持ち、自ら考えて行動できる保育者を育成できることに繋がることのできるのではないかと考えた。試行錯誤を繰り返し、3年間取り組んできたプロジェクト学習の結果をここにまとめ報告する。

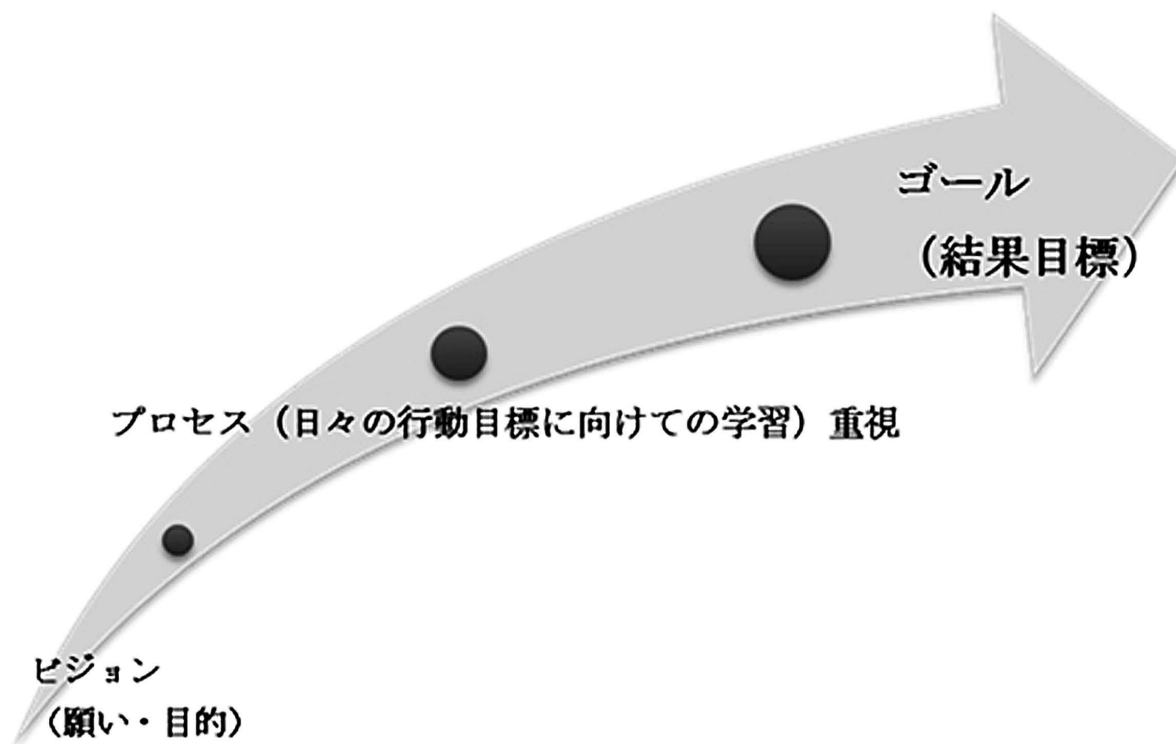


図1. プロジェクト学習のイメージ (成長過程)

## 2. A看護専門学校での取り組みと結果

### 2.1 方法

成人看護概論は、1年次後期に開講する。15回(30時間)中、8回目の授業からプロジェクト学習を実施した。

#### 2.1.1 単元目的・目標

目的：成人期にある人の健康と生活の関わりを学び、人間にとっての健康とは何かを考える。

目標：成人各期にある個人の生活習慣を知り、その対象がより健康であるための課題を見出す。

プロジェクト学習テーマ：成人各期の健康課題と生活習慣－18歳からの健康的な生活を考える－

### 2.1.2 プロジェクト学習実施手順

学生が行ったプロジェクト学習の実施手順を下記に述べる。

- ① 自分の周りにいる人で入院していない成人（友達、親、祖父母、叔父叔母、先生など、65歳までの人で続けて何回かアポが取れる人）をじっくり観て「気になるシート」を作る。
- ② 対象の気になることから一番気になることやしてあげたいことを書き出しテーマとする。（この際教員は、成人の健康が意識化できるよう学生に問いかけていく。）
- ③ 対象の気になることについてインタビューをする。
- ④ インタビューシートを整理し、課題を見つける。
- ⑤ 見つかった課題からテーマを具体的にする。（この際教員は、学生と対象の目標を決めるコーチングを行う。）
- ⑥ それを基に原因など気になることを再びインタビューをし、しっかり原因を追及する。（この際教員は、思いつきでなく、エビデンスを求めていく。）
- ⑦ 原因追及したことから解決策を考える。
- ⑧ その中から、対象が、健康的に生活していける（実行できる）ための具体的な提案をまとめる。
- ⑨ ポートフォリオ集を作成する。
- ⑩ プレゼンテーションを行い、他者の発表も見ながら、自分のポートフォリオ集を自己評価する。

### 2.2 結果及び考察

「母親の肩こりを少しでも軽減するために」や、「父親のメタボ対策」など、様々なテーマが上がっていた。解決策については、1年次後期ということもあり、教科書上のことが多く羅列されており、対象にあった現実的なものであるかという点では課題は残った。しかし、終了後に実施したアンケートでも、他者の発表を聞くことにより、同じテーマでも自分が調べたこととの違いから、「一方向から見るのではなく、多方面からも物事を見ることができなくてはいけない」や「対象に知識として情報を与えるのではなく、対象が読めば分かり、実施できるものでなくてはいけない」との気づきも見られていた。グループ学習ではなかったために、「知の共有」という点ができるか不安であったが、プレゼンテーションを通じて十分にクラス全体が学びあうことができていた。

学習方法についても、「一人ひとりのテーマが違い、自分でやらないと何も始まらないので、自分で考えることの大切さを学んだ。」や「久しぶりに親や祖父母と話し、興味を持って話をしたり、こちらが意識的に見ていかないと、何も見えていないことが分かった。」という前向きな意見もみられた。

授業時間内で行うことに限界があり、持ち帰り学習が多くなったこと等課題は残ったが、学生個々が自主的に学習でき、その結果、学生に学んでほしいことが意見として見られ、手応えがある学習方法であった。

### 3. 本学幼児教育学科での取り組みと結果

#### 3.1 初回の取り組み経緯

「子どもの保健Ⅱ」の授業は、演習が主であるが、一度にクラス全員が演習を行うことは難しく、半数ずつの演習となる。演習を行わないグループの課題学習として、看護専門学校で行っているようなポートフォリオを活用したプロジェクト学習方法が取り入れられないかと考えた。「子どもの保健Ⅱ」は2年次前期に開講され、1年次には第1回目の保育実習が済んでいる。また本学は、子育て支援対策として、親子が集う「つどいの広場」や「ちびっこ広場」（以下、総称し「広場」と略す）などを開設していることから、身近に子どもたちと接することができる環境である。接した子どもや親をみて、気づきや気になることがあるのではないかと思い、その気づきを意識化してもらうために「親と子の健康を守る」プロジェクト学習を実施することにした。

#### 3.2 方法

15回（30時間）中、実技演習を行っていない7回で、実技演習とプロジェクト学習は交互に行った。

##### 3.2.1 単元目的・目標

目的：子どもの健康と生活の関わりを学び、子どもにとっての健康・発達とは何かを考える。

目標：子どもを取り巻く生活習慣を知り、子どもがより健康で、成長発達していくための課題を見出す。

プロジェクト学習テーマ：プロジェクトN（奈良文化）－お母さんと大切な子どもの健康・発達を守るプロジェクト－

##### 3.2.2 プロジェクト学習実施方法

主な手順は、看護専門学校と同様に行った。その際、インタビューにはこだわらず、広場に来ている親子や、実習で接した子どもから、何でもよいので、まず気になることを羅列させた。気になることが浮かばない学生には、「お母さんやお父さんに自分を育てるときに、どんなことが心配で気になっていたかを聞いてみよう」という課題を与えた。「気になるシート」の整理については、「なぜ気になるのか」「今まで習った発達段階からみて、何が気になるのか」など、具体例をできるだけ出して進めた。出てきた課題からテーマを具体化させた。テーマの具体化やテーマについての学習に際しても、持ち帰り学習ではつながっていかないと考え、できるだけ、授業時間を有効に使えるように指導した。途中、実習が入ることもあり、「同じように気になる子どもがいたら、先生たちはどのように対応されているか、観察したり確認したりしましょう」と促した。テーマにあげた気になることの解決策を考え、最終レポートとして、「子ども（または親）が健康的に生活していけるための具体案」をまとめ、ポートフォリオ集を仕上げさせた。

### 3.3 結果及び考察

最初の気づきを羅列する段階から、書けない学生や、グループワークに全く入っていけない学生が数名いた。目標表現があいまいであったために、学生は範囲が広く、絞り切れなかったのではないかと考える。そのため情報を選ぶことができなかつたのではないかと考える。情報を選びきれなかつたために、「気になるシート」の整理ができず、テーマの具体化にもつながらなかつた。また、「看護は観察から」と常に教えられ、「観察」と言う授業単元もある看護学生とは違い、見たり聞いたりしたことを意識化させていく事前学習を十分に行わないで始めてしまったことも原因であろう。

ポートフォリオ集も、2～3枚のインターネットでの検索情報と最終レポートをだけを挿んでいる学生が半数近くみられた。最終レポートも、抽象的であり、解決策と言うよりも、調べたことの明記に止まった。これは、最終レポートと表記したことも、原因の一つであると思われるが、積み重ね学習の意味が十分に伝わっていなかったのではないかと考えられ、反省すべき点である。

最終に行った自己評価の自由記載欄には、「最後までよく分からなかつた」「何のために必要なのか」という意見もみられた。鈴木<sup>2)</sup>は、ポートフォリオによる知の再構築には「意志あるスタート」が大事であると述べている。最初の説明で、「することの指示」に重点が置かれ、「何故するのか」など、することの価値が伝わらなかつたために、この意志あるスタートができなかつた。また、実技演習と同時進行であるため、教員が十分にかかわれなかつた。そのため、すべての段階でフォーカスできず具体的な提案へと進まなかつたのではないだろうか。

1年目の反省をもとに、2年目はオリエンテーションと、テーマの具体化や解決策を考える段階でのコーチングなど、学生との対話に時間をかけた。その結果、1年目よりやや改善がみられた。テーマも、「朝食をしっかりと食べるためには」と言うような具体的なものがみられるようになった。しかし、自己学習の仕方が分からないため、依然として数件のインターネット検索で学習が終わり、最終レポートもその内容の羅列に止まった。

良かった点として、「初めての学習方法で戸惑いもあったが、漠然としていたことが、調べていくうちに分かってきた」と言う前向きな意見がみられたり、筆記試験では見ることができない学生の意外な一面もポートフォリオ集では見られたりした。このことから、反省点を改善していくことで、学生の自らの学びを深め、個々の学生なりの自己成長ができるのではないかとと思われる。

## 4. 新しい取り組み

そこで、今年度に行ったプロジェクト学習は大きく変更を加えた。実施時期は変わらず、2年次前期の「子どもの保健Ⅱ」の中で行うが、1年次の「子どもの保健」の授業から、2年次のプロジェクト学習に向けた学習を取り入れた。また、広場で配布する保健便りを作成するという具体的な目標に変えた。

### 4.1 1年次の学習

「子どもの保健」は通年の授業であり、1年を通して、色々な単元でテーマに向けたグループワーク

や課題学習を行い、発表する機会を作った。発表するためには、根拠のある情報を添えなければならず、調べ学習へとつながる。また自分とは違う他者の意見を聞くことで、気づく力や色々な角度から物を見る（観察）力を身につけることを目標にし、2年次の学習に結びつけていくようにした。

まず前期には、事例学習を行った。母親が困っていることに対して、アドバイスをするという設定で学習させた。単なる調べ学習ではなく、同じ一つの事象でも理由は様々であることから、母親が困っている理由を考えながら自己学習していくことが大切だと気づけるようアドバイスをした。

後期には、保健便りの事前準備段階として、時期ごとの子どもの保健計画を考えさせた。その時期の行事や、起こりやすい病気やケガを調べ、保健目標や指導内容を考えまとめさせることで、学生には、この段階から2年次のプロジェクト学習が始まっていることを意識づけさせた。

## 4.2 プロジェクト学習

### 4.2.1 単元目的・目標

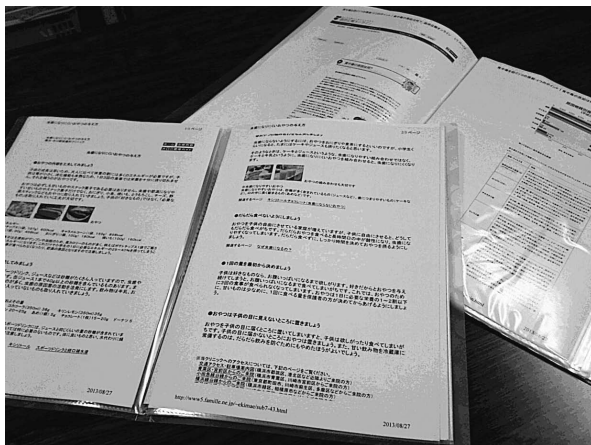
目的：子どもの健康と生活の関わりを学び、子どもにとっての健康・発達とは何かを考え、保育者として行えることを考える。

目標：つどい・ちびっこ広場で配布する保健便りを作成する。

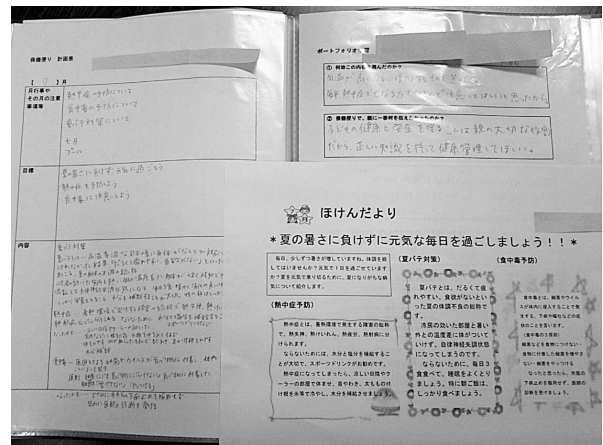
プロジェクト学習テーマ：プロジェクトN（奈良文化）－お母さんと大切な子どもの健康・発達を守るプロジェクト－

### 4.2.2 プロジェクト学習実施方法

基本的な実施手順は、前回と同様である。「広場で配布する保健便りを作成する」という目標にし、より子どもに合った内容が考えられるように、6月の保育実習が終わった段階から行うこととした。まず1年次に行った保健計画のアドバイスをもとに、自分が担当する月の保健便りを作成するための文献学習を行わせた。「計画シート」に、月行事や流行する病気など、その月の保健に関する気になることを挙げさせた。つぎに、一番気になることをテーマとして保健目標を挙げ、具体的な内容を考えてさせた。保健便りはA4一枚とした。広場に来る母親の知りたいことは何であるか、数ある内容から何を選抜しなくてはいけないのかを、しっかり考えさせた。同じ時期を取り上げる学生同士で、作成した保健便りのプレゼンテーションを行い、自己評価・他者評価をさせた。最終的には、評価表も含めた1冊のポートフォリオ集（図2）を作成させた。



a . 収集した資料



b . 学習シートと保健便り

図2. ポートフォリオ集

プロジェクト学習は、一般的にはチームで進められる。チーム作業により作業範囲が広がり、大きな成果が可能になるからである。しかし、1年次のグループワークの様子から、教員が十分にかかわりきれないためにグループ作業が中断してしまうことが考えられたため、個人作業とした。「知の共有」という点は、最後に行うプレゼンテーションで補うこととした。

#### 4.3 結果及び考察

目標を明確にしていたために、学生はスムーズに文献学習を進めていき、保健便りに繋がるべく保健目標を挙げる事ができていた。鈴木<sup>2)</sup>は「ビジョン（目的）とゴール（目標）をしっかりと持って、そのゴールが『他者に役立つ成果物』を生むことに価値がある」としている。実際に、広場の母親たちに保健便りを配布して役立ててもらうためには、裏付けをしっかりとしなければいけない。根拠ある情報でなければ提供できないために、1つのインターネット検索情報が正しいとは限らず、関連する内容を幾つか探さなければならない。保育者を目指している学生たちは、「大変」と愚痴をこぼしながらも、実践に役立つことが分かっているために努力をしていた。学生によって検索した文献や情報集数に差があるものの、自己評価表でも、ほとんどのものが「意欲的に取り組んだ」としていた。

今回、保健便りはA4一枚とした。制限をすることで、内容を選ぶという作業が生まれる。選ぶためには、学習が必要であり、選ぶ理由を明確にしなければならない。また、同じテーマでも、具体的な内容は、学生個々が、何を親に伝えたいかによって変わってくる。この作業は、学生にとって最も大変だったようで、自己評価表でも、「本当に広場の母親たちにあった内容であるか分からない」と答えていた。しかし、他者の発表をみて、「同じように授業を聞いているけど、大事と思う部分が少しずつ違っていた。」「同じ内容でも伝え方が違うと全く受け取り方が違う」と言う意見もみられ、学生の成長にはつながっていると思われる。

しかしながら、プロジェクト学習への主体性という点は、学生による差が大きい。保健便り作成は、分かりやすい目標であったために、学生皆が最終的にはまとめる事ができているが、ポートフォリオ

集に綴じられていた中身は色々であった。数枚の他の施設の園便りをコピーしただけの学生もいれば、テーマ内容について、しっかりと文献学習を行い、自ら獲得した多くの情報を挿んでいる学生もいた。主体性を育む参加学習として、すべての学生に効果があったとは言えず、作成過程より、保健便りという作成物に重点が置かれてしまった結果と思われる。

## 5. 現状の課題

ポートフォリオを活用したプロジェクト学習とは、結果ではなく学生が成長していくプロセスを大切にすることである。しかし、ポートフォリオ本来の意味である積み重ね学習ができたとは言えない学生もみられた。今回の学習を通して、現状の課題は次の3点であると考え、次年度での変更を考えている。

- ① 対話：ポートフォリオを活用したプロジェクト学習は、あらゆる過程での「対話」が重要である。教員と学生、学生同士、自分自身への問いかけである。今回、個人作業としたことで、教員のコーチング不足、学生同士の実践を通しながらの対話不足が生じ、「これで良いのか」と言う自分への問いかけがなされず、自己満足で終わってしまった。チーム作業は難しい点もあるが、1年次から意識づけさせることにより、検討していく必要がある。
- ② 評価：「子どもの保健Ⅱ」の単位認定におけるプロジェクト学習の評価が曖昧である。今回は、科目得点100点満点のうち、実技演習およびレポートを80点とし、残りの20点がプロジェクト学習の評価点であった。その観点は、ポートフォリオ情報数、情報内容の妥当性、保健便りの具体的な内容、提出時の約束事などである。プロセスの評価が不十分であり、今後、評価観点および点数配分の検討が必要である。
- ③ 学習テーマ：垂水<sup>3)</sup>らは、「保育者を目指している学生は、『子どもが好き』と漠然と保育職を志望してはいても、保育職に内在する職業的価値を見出すことができていない者が多い」と述べている。本学の学生も同様であると思われ、保育職に職業的価値を見出すためには、今回のような「親や子どもに役立つ成果物」を生み出すプロジェクト学習が大切であると考えられる。しかし今回は、「保健便り」をテーマにしたことで、作成する過程よりも作成物に重点が置かれた。今後は、プロジェクト学習テーマを再検討し、1年次から計画的に行っていくことが必要である。

## 6. おわりに

「子どもの保健」「子どもの保健Ⅱ」という授業時間の中で、プロジェクト学習への理解を促し、学習を進行させてきた。この学習は、所定の時間以外での学習時間も必要とする。家庭学習時間がほとんどなく、保育職に職業的価値を見出せない現代の学生たちに、単教科だけで行うことの限界は少なからず感じている。専門職としての意識を高めるための有用なツールとして、ポートフォリオを活用したプロジェクト学習が注目されている以上、今後は、短期大学全体での取り組みとして考えていくことも必要



であると考える。

#### 引用文献

- 1) 鈴木敏江(2011)看護師の実践力と課題解決力を実現する！ポートフォリオとプロジェクト学習. 86-108. 医学書院.
- 2) 前掲1
- 3) 垂水直樹 金俊華 林幸治(2011) 保育士養成校におけるキャリア教育の課題—適性検査の分析を通して—. 近畿大学九州短期大学紀要第39号：59-69.

#### 参考文献

- 1) 八重樫文 佐藤圭輔(2012) プロジェクト学習(PBL)の授業設計・実践における背景理論とその評価—「環境・デザイン実習」の実践を通して—. 立命館高等教育研究11号：183-198.
- 2) 阿部幸恵(2013) 臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育. 医学書院.

